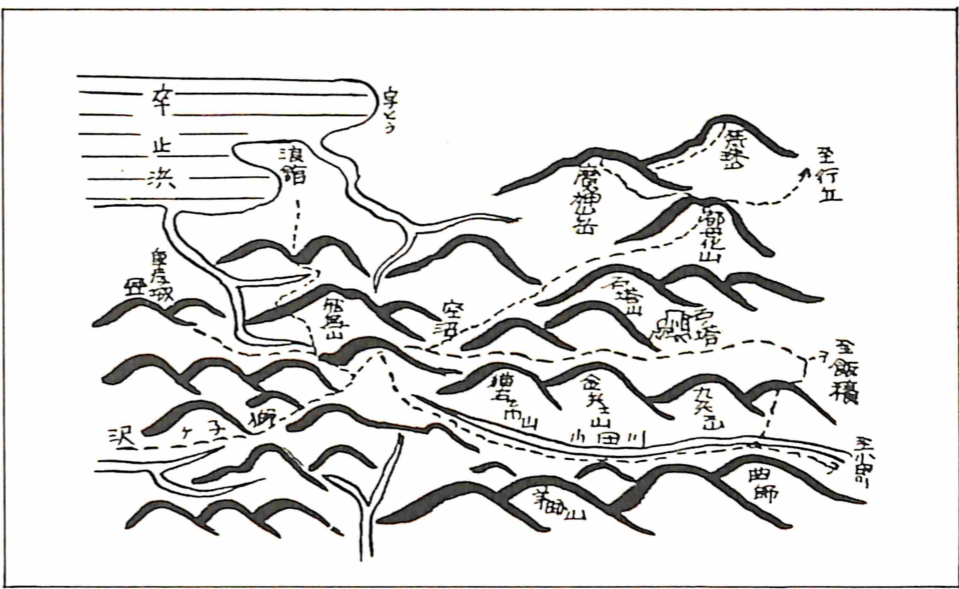


みると、石器などで、どのように組合せられていたのか、津軽方便として独特の謎を有する。



寛政六年五月和田長三郎 中山連峰踏査図
 (東日流外三郡誌によれば「飯積より五里、山谷を越え、小田川を登り、タダラの沢を登りつめ、峰越えに郡堺を、卒止次 討論に峰降りて、飛身山に空けり」とある)

私たちの津軽言葉の中に、このように古き良き時代の名残りをとどめ、

これは、陀眠であって、今眠りにつくのであるが、夕べに死んでも朝になって生れ変わって来いと願望であったのである。ダミの象形文字としてダミが残されている。死者のための追膳供養の精神が限りなくそこに秘められている。

この一例をみても、果して日本のどこに象形文字があったであろうか、民族が独特に築いた文化は、日本のどの地方にあったであろうか、五世紀の中頃より、どうやら朝鮮を渡って大和に文字が始めて入ってきているが、数千年以前より既に文字を開発して、独特の文化を築いて行ったことは、私たちの住む東日流以外になかったのである。古代の安東浦こそ、日本の発祥の地ではなかったのではないか？

かつての東日流は、古代中世期にかけて、この安東浦周辺は豊かな集落を形成していたと記録されている。自然を愛し、自然を守り、自然と斗いながら、生活の知恵をもって、私達の祖先は今日まで脈々として歩んで来たのである。

『古代の東日流と東北』

荒吐一族が安東浦に居をかまえて、やがて奥州六郡と出羽を統一して大和朝廷の支配する五畿七道は、やはり王者の征服欲から、これを手中に入れようとした。この頃朝鮮より渡った卑弥呼は、九州日向に拠館をした。やがて日向族は大和へ北上して畿内征服をしたが長髓彦と兄の安日彦は蒼海をあとに、若狭湾をめざして進撃していった。当時日本海は安東浦と支那・朝鮮への海上の検舞台であり、安東一族(荒吐の民)は海上における水軍の強さにおいて、古来日本随一とされていた。

今日なお生きつづけている言葉の一句一句こそ、津軽のほこりを見付けることができる。

次に昔の結婚については、今日のように嫁入り婿もらいなどの風習は記録として残っていないが、まだ仏教の入らない以前、山川草木を禿く神とし、象形文字で表現されていたとき、男の象徴としては、古来種族繁栄のため、特に強たくたくましくの願いがこめられ、崖に生えている一本の木のように風雪と戦いながら、それは社会の嵐に耐えるということ、崖木が残されている。語り次がれて象形文字となっている。

女に対しては、ゆたかな湖(浦)のごとく、そこには魚族がたくさん生れ、素直に、心は静かで、子孫のために、たくさんの子供があるように囲いとして、辺にかこまれた湖(池)に魚がたくさん生棲している象形文字が残されている。



祝いのりとの言葉として、

男 サザレヤ サザレ ビッキ ガモク
 女 サザレヤ サザレ ビッキ イヘン

として、となえられているのである。

サザレとは、永遠に種族が絶えることなくの意味で、またビッキとは子供のことであり、東日流古来からの、このりとの言葉は、自然崇拜に基く子孫繁栄のいのりであった。

更に、花に際して、埋葬の際には、次のようなことが発見されている。ダミヤダミ ユベ、ナシデエダバ アサマニ マイゲロヤとある。

若狭に上陸した長髓彦の軍勢は、大和に向けて進撃して行った。戦う処敵なく、神武帝の兄をも戦死させ、大和朝廷を三年の間空位せしめて困らしたという。

しかし、奥州を遠く離れての長期戦には、自ら限界があり、荒吐族にも戦のつかれがおとずれた。
 日向より大和へ進んできた稚三毛淳摩命(応仁天皇)は、兄を失いつつも体制を整え反撃に出たことが、長髓彦は肩に弓矢の深い傷を負い破れ、武運つたなく敗れ去った。

この敗戦は、水軍には強い荒吐勢も、大和の山奥深き処の戦には弱く、しかも、遠征軍の長期攻戦は最つとも不利な条件が重なる事は当然である。このため奥州に退いた一族は、この敗戦の体制建直しのために、六郡の諸族の結集をはかり、荒吐五王制度の国内強化をはかった。

古代における国造りについては、日向族は九州より山陽、山陰に進み、大和を征服して、大和朝廷を築いたが、奥州においても六郡制を施き、一国としての国造りの体制を進めていたのである。従って荒吐の独立国とみることが正しい史観だ。

これが大和朝廷より見れば、奥州はいつも化外の地であり、従わぬ民として、夷、蝦夷、アイヌ、浮囚の民として軽蔑していたのである。

だが、大和地方よりみた奥州六郡は、はるかに強力な種族の結集があり、軽蔑されるような弱いものではなかった。

史実の中にも語っているが、日本武尊の吾妻山攻めには不敗であり、関東より東北へは一步も入れなかった。くだって、田道將軍の陸奥の攻略も、遂に將軍が戦死するという敗戦ぶり、これは、いつも強力な体制下に軍備を設けて、外敵の征服には油断なく防戦の勢力をもって

のである。

次に、斉明帝に、租、庸、調に従わなかった安東浦一族に対して、陸奥鎮守府將軍に任じられた安倍比羅夫を征夷大將軍として、大和より海路を軍船百八十艘をひきいてやってきた。

日本史上にも記録として残っているとおり、東夷の民は強くて容易に征服することができなく、遂に和睦して安倍の姓を与え、檢非違使、蝦夷管領職を与えて帰省している。この戦いや、和睦によって、有間浦の惠留間の岬に檢非違使庁の司津（藩の管理所）を設けたこと。交和によって饗宴を開き軍船五十艘を受けた等、このことによって、水軍は、操舵方法、造船の技術を知り、より一層の強力な水軍力を得て海上制破する権力を伸ばす要因となった。

大和朝廷は、まつろわぬ民として、寛嚴外交をもって平征しようとしたが、以前として貢物をせぬため、四道將軍のうち最つとも東北を知っている坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じ、節刀を授けて奥羽東征に出発したのが延暦二十年二月であった。

この年の九月に朝廷へ蝦夷平征を報告し、翌二十一年一月に出羽胆沢城を築かせ七月に帰京した。だが蝦夷は、その後も再三にわたり反旗をひるがえし、大和方をさんざん悩ましている。

大同二年一月、陸奥国に和我、葦縫、斯波の三郡を置き、大和朝は同年四月文室綿麻呂を征夷大將軍に任じ、天長七年一月出羽国に大地震あり、阿北城・四天王寺倒れ治安が乱れ、承和四年四月陸奥出羽按察使がこの争乱を報告している。

同年六月出羽最上に濟苦院を建立。同十年四月陸奥の国へ兵士増援して八千とし、六番編成を八番編成に組換えしている。

このように数十回に及び奥州陸奥の国に大和朝廷は侵攻し、同族争いもあつたが、大和朝廷は常に、租・庸・調の年貢の取立てにやっきとなつていたのである。奥州の豊富な資源を手中に納めるために。

平安朝における庄園制度は次第に住民を苦しめていった。区分田制度により地方豪族がばっ起し、平氏一門による政權を握るようになった。特に平将門の変以来、関東の武士団からのろしの火の手が上つた。この先鋒にまつり上げられたのが源頼朝であった。武家の政治革命であった。全国七八ヶ所に守護職を置き、三〇〇〇余に及ぶ地頭職を設置手中に納め、大和朝の中央貴族階級の中央政權は終りをつけた。

この地頭職制度が次第に地方武士団の勢力が強くなり群雄割拠の鬭争に化していった。この武家専制政治が源氏より北条へ、そして足利氏、織田・豊臣から徳川へと続くのである。

戦乱と東日流

奥州平泉文化と東日流との関係については、何よりも平泉藤原四代の足跡に学ばなければならぬ。二代秀衡が陸奥守に任じられて、奥州支配者になり、以後は武装中立で時の権力者と対応している。したがって平泉を一步も出ず、結果的には背後から鎌倉幕府源頼朝を常制し威圧する形となったことから、頼朝の奥州征伐の端緒となつたと解する。

『東日流の戦乱』

文治三年（西暦一一八五年）秀衡が没して後の平泉藤原氏は、頼朝の

貞観十一年五月再び陸奥国に大地震あり、同年十二月争乱ありと報告。元慶二年六月小野春風を鎮守府將軍に任じて出羽を討たしめ、同年七月出羽国藤原保則の勝報を告げている。

寛平七年十二月檢非違使の職掌を改め、承永七年十月平将門謀反起す。同年十二月将門一族破れて陸奥の奥地に逃げ、この一族安東浦に入り、一族東日流の地に安住す。

永承六年六月陸奥国王安倍頼時、朝廷の債苦な年貢に耐えかねて争いを起した。陸奥守藤原登任・秋田城介繁成が制覇に向つたが破れ、遂に源頼義がかわつて追討することとなった。これが有名な前九年の役である。

天喜四年七月源頼義再任されて安倍頼時を誅す。八月に東海・東山道よりの諸国より食糧を陸奥に送らせ、だが同年十一月頼義は頼時の子貞任に敗れ去つた。

康平五年春、陸奥守源頼義任期終了となるも、同年八月重任され、出羽の清原武則と共に安倍宗任を破つた。さらに九月貞任を衣川関・鳥海柵に破つて誅した。ここに前九年の役が終つた。追討の功によって頼義を伊予守に、源義家を出羽守に、清原武則を陸奥鎮守府將軍に任じている。一方康永七年三月安倍宗任を伊予に配流し、治暦三年二月伊予より大宰府に移している。

延久二年二月陸奥守に源頼俊を任じ、下野守源義家らは謀反を起した藤原基通を降す。永保三年三月陸奥守八幡太郎源義家は再び奥州に赴任する。このとき清原家衡が同族真衡と相争い、義家は真衡を助けて家衡を討つた。これが後三年の役である。嘉保元年三月義家は出羽の平師妙を平征している。

奥州征伐の口実となつてしまつたことは皮肉なことである。この頃は又、一族の内訌が深まり、国衡・泰衡兄弟の相統争いが一族の結束を大きく乱した。

文治五年、鎌倉幕府の奥州征伐によって、歴代の俘囚長時代以来永年の伝統を誇つた『みちのくの政權』もくずれ去つて、遂に鎌倉幕府の支配下にはいつてしまひ、この争乱によって平泉の文化財や、城郭や社祀、仏閣等が焼失している。

ここで私たちは、一族の内訌について、その要因はどこにあつたか探ってみると……。

『平氏政權成立の諸条件』についての記をみると、単婚家族形態のことである。これは、中央貴族に一步先立って、安倍一族、藤原一族が単婚家族世帯化したことで、ここでは男系中心の集落化がいとまれ、種族の強化をはかっている。安倍時頼はその居衣川で八人の男女子が軒を並べて居をかまえていた。後の平家専横の京は、西八条・六条・六破羅居住より先に、この単婚世帯化横構成を如実に実行していたのである。このような形で進められた当時の氏族形態は、相統問題が起つた場合に、互に譲らず遂に力にも云わせて卒を向け合うこととなつて、内訌（内ケンカ）となつて、共に滅亡の運命をたどることとなる。

さて、前九年、後三年の乱に続く文治五年平泉の乱について、大河兼任の乱が起つた。平泉藤原氏を滅した頼朝は、葛西清重を平泉に置いて奥州惣奉行とし、東北地方の経営に当らしめた。これを喜ばない藤原泰衡の家来大河兼任が文治五年十二月軍を集めて、鎌倉幕府に對抗した。鎌倉方は直ちに越後信濃の御家人を派遣し、続いて工藤行光由利維平を先達させた。

兼任の軍勢は強く、且つ秋田の北部から津軽に攻め入り奪戦、幕府方

の宇美実政・由利維平たちが戦死するという状況であった。戦に不利とみるや鎌倉方は、千葉常胤・比企能員・足利義兼を出陣させ、栗原の一迫や平泉の衣川で兼任の軍勢を破り、さらに外ヶ浜と糠部の間の有多宇末井の梯（浅虫と久栗坂の間の善知鳥岬といわれる）に、大河軍勢が追いつめられて、遂に討ちほろぼされ、兼任は秋田北部から岩手県の栗原寺のあたりまで逃れましたが遂に、捕えられて殺されてしまった。

この事件は西暦一一九〇年（建久元年三月）に終わりました。この乱の



かような往時と現在とを相対する中で、今日この史実に最も重要なことは、この頃福島城には男の子がなく、その相続人を求めることであった。

※ ※
康治年中（西暦一一四二年～四四年）に東日流六郡のうち章和、平賀、田舎郡は藤崎城の支配下におかれ、恵流澗（入澗）郡の十三城を築いて住んだが、その後、父基衡の遺命により、六郡および糠部・卒土浜・松前三郡を領することになった。また、嘉応年間秀衡の舎弟秀栄が福島城に養子縁組となり、同二年に従五位下左衛門尉に任じられ、これより十三藤原左衛門尉秀栄と呼ばれたのである。その後治承五年（西暦一一八一年）に従五位上陸奥守となったが、翌永元年に山王坊に出家した。嫡子秀寿の早世により、孫秀元が後をつぎ、秀栄は霊鷹山檀林寺に隠居したとある（前代歴譜参照）。

檀林寺は中尊寺を凌ぐ壮大華麗な寺院で、現在の跡より五輪塔、佛像、瓦、青磁、白磁などが出土している。つづく秀元は早くから安東一族の水軍の増強の必要を認め、唐に渡り、造船技術を学ぶために出国しているが、後の事蹟については詳しくなく客死している。

この頃の京都では、平家物語にある後白河上皇の出家、清盛の娘徳子入内、六波羅密寺焼失、清盛兵庫島を築く、京都大火、鹿ヶ谷の陰謀、平重盛没す。福原遷都、源頼朝挙兵、源義仲挙兵、一の谷戦、屋島の戦、壇の浦戦、平家滅亡となった時代である。これより寿永三年（西暦一一八四年）に源頼朝は鎌倉に公交所、問注所を設置して幕府政治を確立した。

寿永二年癸卯（西暦一一八三年）福島城主は南出城・東出城の築城から始めて中央の泉山城を全面的に改装、約三年の才月をもって十三浦諸

後に頼朝は、伊沢家景を留守職に任命したので、葛西清重と並んで奥州惣奉行制を確立し、奥州支配の体制を完成した。

※ ※
中央と奥州のこのような動きに、東日流の時代構造はまた、太平を築くために、城廊の建立、社祀、仏殿、農耕、民衆のための強大な基礎づくりを惜しまなかった。

福島城の史跡については、既に縄文、貝塚、弥生時代よりの先住民族の生活の跡が現在も歴然として見聞し得るところで、王瀬堂は二王の再葬以来古墳として一族の魂を安置せしむる地であった。

更に上古代にさかのぼっては、古典に稻城・唐人館として名を止めている処を察すれば、三千年以前より既に唐・晋・韓・高麗よりの往来があり、その中には多数帰化した人々の多かったのは事実であろう。大和の国においても当時既に相当の帰化人の居住していた事は日本史の中でも明らかである。

二王の再葬当時より、荒吐一族の生活は単婚家族制度を尊重し、種族の強化をはかった経移は歴史のうえからも明らかで、今も古代の安倍一族の地名が、東日流全域にわたって存在すること、それを物語る何よりの証左である。

東日流の海・河のある処に必ず城柵があり、土るいがあり、それが又寺社の足跡を残していることは、そこに一族の鎮守の護神を祀ることは、古代の風俗を究明する上に存在しなければならない事実で、安東浦に一族の根拠地が築かれ、陸奥国最北端にあなどり難い勢力圏を造ったことは、王呂慮浦を中心とした大陸との交易、藤崎を中心とした米の豊饒が庶民生活に安どを与えていた。その上、野鹿、馬が多く、河川には鮭・鱒がたぐさんとれていた。海産物も豊富で魚類、貝類が無尽蔵にあった。

城の完成をみた。

寛喜元年（西暦一二二九年）に従来の参勤交代の約束を破った藤崎城主に対して怒りおさい難く、秀直は安東太郎の軍勢を率いて東日流萩の台（弘前市津賀野）において戦うこととなった。

なおこの乱の原因は、第五世安倍福島城主息女清姫が平泉藤原秀衡の舎弟秀栄が養子相成り、ここに第六世城主に迎えられるも、建久六年乙卯（西暦一一九五年）に藤崎城主安東堯秀が蝦夷管領任官以来福島城主とはいくらかの疎遠となり、鼻和郡に幕府召しかかえの曾我忠廣と親交の間柄となり、内三郡を鎌倉幕府の名代としてこれを治領し司ることとなった。これは東日流外三郡城主名代の恥辱にかかわるものではないか。

押領茲に許しまずとして三代將軍秀直は大いに怒って、先づ安東駐領の泊柵を焼討し、ここに挙兵して、藤崎城進軍を開始した。だが城へきは容易に攻めることができず、萩野台にこれを討つべき巨勢をもって藤崎城主は一挙に進撃したので、多勢に無勢の秀直軍は敗れ去り遂に捕われの身となった。

ここに秀直の斬首をきめていたが、所詮は安東一族の豪勇を処断することは、一族の血を断つこととなり、同族の内訌を以後全くないことを誓えて、秀直に対し、外面上は渡島流罪と決めて、この上は蝦夷地の征服に全軍を派遣せしめた。

文治二年より着々とその行動を起していた蝦夷地統一は、これを契期に秀直みずから引率して渡島に渡り、夷地攻略の拠に付く。

先づ華沢柵、勝山柵を築き、日高族、北見族の六人の酋長にあて使を派遣し、安東管領下に参加するか否かを確かめさせた。

時に夷地日高に酋長(舎毛)が勢力をはり、於盧著丸、辺利賀丸、於処辺丸あり、北見には阿弥止呂丸、賀無伊丸、伊止辺地丸と称せる酋長あり、これら酋長に属する船団は時として十三浦にも出沒して異土船を襲うありて、三年の歳月を要して治めることができた。

この戦功によって安東貞季は建保八年より夷地の開港をすべく、十三安東水軍を総挙して、北見の国、日高国に港を開き、交易を振興させたという。

※ ※

十三港の開港はつまびらかでないが、全国的に三津七港の一つとして栄えたことは事実で、上古より長髓彦子孫代々より安東浦の十三岬の集落する処として、日本随一の港の一つであった。

北部に安東氏、南藤崎安倍氏とはいつしか一族として、愛季、堯季とつらなり、十三港は異国船との交易を盛んならしたと前節で申し上げましたが、西暦一二二三年の廻船式目の記録にも、和泉の堺(大阪府)、博多宇の津(福岡県)、越前の三国(福井県)、能登の輪島(石川県)とならぶ中に入る良港として、唐、韓、ヒリピン、マレー、天竺(印度)まで交易していた。

特に仏教の伝来に当っては、その教条を求めするために異国の僧侶の往来にはきわだつて目立ったものがある。福島城下の山王千坊における帰化僧の数はおびただしい。

鎌倉時代の末につくられている『十三往来』『十三新城記』の記録によりますと、十三港には全国各地からたくさんの商船が集り、商家も多く立並ぶ様は、市街を呈していたという。態野権現、羽黒権現など、その他の寺社もあり、特に浜の入潤大明神は壯麗を極めるものがあつたと

記されている。平時は海運に出かけて食生活をまかない、有事の際は安東水軍として日本海にいつでも出られるよう柴崎城下、海づたいに軍船を停泊せしめたとする記録が残されている。

この頃には、蒼海(現在の西海岸出来島より岩崎までの一帯)各地域に夫々領地をもち、宗季の子高季は藤崎にいたと記されており、安東一族は、この頃が全盛時代であり、吹浦附近(深浦)、討万辺(後深)、矢沢(平賀)などにも居住し勢力をかまえていた事を推察すれば、岩木川沿岸、西海岸、外ヶ浜から、宇曾利郷(田名部)をも支配していたのである。

最も勢力を伸ばしたのは貞季以降とみられ、京役の地として、京都の貴族階級を本所とする荘園領主とする朝廷方へ貢物を奉じていたと記されている。

東日流六郡に対して、この頃糠部五郡の記録を見受けられますが、色々の学説や文献からも現在なお詳しくなく、今後に残し問題とします。私の推察では、鹿角・三戸・九戸・岩手の五郡とする(岩手県の北部・一部秋田県の東北部を含めて)から、下北半島の太平洋側の地域全般をさす呼び名が糠部であつたからである。

安東氏の活躍した舞台は海上交易であり、日本海こそ安東水軍の検舞台であつたことを特に印象づけられる。まさしく日本海時代であつたのである。世門北(下北)は勿論、男鹿半島附近の白山権現に建長(西暦

記されている。

藤崎から十三に進出した安東氏は、貞季・季長のとき、正和年間(西暦一三二二年〜六年)にわたり、新しい城を築きました。これが改築されたか、更に新しく構築したのか福島城で、十三新城として発足している。

この城郭こそ、現在に史跡を止どめている城跡であつて、実に六十二万五千平方メートルという大規模なものであつたことがわかつてきた。更に北方二千キロの処には支城といわれる唐川城、この城郭の東千五百メートルの地点に十三山王千坊が創設されている。中央には日吉神社があり、中央大通りと東小路・西小路あり、十三宗の寺院がいらかを並べて建立されたことが、最近になってその全ぼうが明らかとなった。禅林寺・竜興寺など寺院址もあつて、この附近こそ往時安東氏繁栄の昔を偲ばせる地区一帯である。

十三港は、この後北朝時代の興国元年(西暦一三四〇年)の大津波によって、一瞬にして壊滅し去つたことは、あまりにも無残という外はない。港は勿論、城も多くの寺社も、集落も、水渦の中に埋もれてしまつたことは後世の人々によって語り伝えられた処で、今も湊迎寺にその記録が多く残っている。江戸時代から明治十二年頃まで、常にこの十三湖の水戸口の掘直し工事が行われているが、往時のそのときの多くの仏像や陶磁器と古銭など発掘されてきたのが随所から見聞される所で、かつて繁栄を想像することができる。

※ ※

十三湊へ進出したのち、安東氏は太郎(貞季)と次郎太郎(宗季)の二つの系統に分れたのではないかと推察される。この事は、本家の貞季一二四九〜五五年)の年号があり、安倍太郎吉定の棟札が発されている。同じく男鹿の月積寺の仁王門は建長五年(西暦一二五三年)に安倍盛季が建立し、多宝塔は元徳三年(西暦一三三一年)に安倍高季が建立した記録が残されている。日本海交易には男鹿と安東氏の重要な一つの拠点であつたことは東日流安東を探るには重要視しなければならないところである。

※ ※

嘉元四年(西暦一三〇六年)には、鎌倉幕府より公認の『関東御免』の証状をもらつている。

これは東日流安東船二十隻の指定をうけ、このうちの一隻が三国(福井県)に來航している記録があり、これは室町時代の永季八年(西暦一四三六年)に安倍康季が、前年に焼けた若狭の羽賀寺(小浜市)に松材を寄進し再建している。

この頃の若狭の国は、北条氏の得宗領であるにもかかわらず、越前や三国に出入りしている事は、友好があつたことを物語っています。更に下つて、応仁二年(西暦一四六八年)に安東師季は、東日流において南部氏と争い失つた領地の回復を紀州(和歌山県)熊野神社に祈願している。

熊野那智山の米良家には幾つかの安東につながる幾多の關係記録が残つてある。その他北条得宗領の播磨(兵庫縣)、備前の船上山、瀬戸内海の因島、塩泡諸島、九州博多などにその足跡がある。

さらには、満州と北朝鮮境黄緑江河口の安東港は、安東一族の誰かが開港したとの記事があり、平家敗戦の残堂が多数海を越えて逃れ去つたとある。遠くはマニラ・マレー諸島までも航行した足跡があり、唐・天竺まで進出したなどを思い、これらことから考えて安東氏の検舞台は、



日本海にとどまらず、東支那海・マニラ海峡・印度洋まで海上交通で日本随一の船団を組んで活躍していたことが知られましょう。北条氏の執権としての勢力拡大にある頃、幕府に馬数頭を献上するとあるが、かなり北条氏に接近している事実があり、東と関係深い各地の豪族とも親しくし、その近臣を用いていたことなども、このことによって、十三湊の繁栄に深い影響があったことを知ることができる。

※ ※

した軍船名は左のとおりである。

唐涛丸	熊野丸	安涛丸	伏見丸	神名丸	蔵王丸
青竜丸	安東丸	東濟丸	天誅丸	韓国丸	神風丸
弁歳丸	涛浄丸	十三宗丸	渡島丸	修験丸	白雪丸
巖鬼丸	追手丸	天竺丸	平将丸	波羅密丸	大宰丸
大峯丸	大日丸	往来丸	北条丸	八幡丸	金神丸
大歳丸	皇帝丸	五行丸	竜王丸	京師丸	伝法丸
東日流丸	朝日丸	法城丸	月氏丸		

右の安東船は、後の弘安辛巳年に参戦して皆滅せし軍船名である。

元禄十年四月十三港船供養講中記

安倍一族元寇之戦殉死塚の記

文永己巳年、天弥生於対馬冲海戦 元之船と殉死せる安倍氏一族之霊魂之為菩提建之

- 安倍五郎盛季 (行年二十六才) 安倍小五郎兼任 (行年四十一才)
- 安倍小太郎義季 (行年三十五才) 安倍次郎重季 (行年五十一才)
- 安倍宗十郎光成 (行年二十一才) 安倍佐太郎孝季 (行年三十才)
- 安倍金佐エ門秀任 (行年二十三才)
- 南無阿弥陀仏 弘安甲申年五月 是建

- 弘安辛巳年五月 蒙古討伐之出船 築紫之浦殉戦安倍一族之塔の記
- 安倍円次郎頼季 (行年二十一才) 安倍義郎忠季 (行年十六才)
- 安倍太郎貞季 (行年三十才) 安倍甚三郎成任 (行年四十六才)
- 安倍定次郎房季 (行年五十才) 安倍与四郎勝季 (行年二十五才)
- 安倍善四郎尊任 (行年二十才) 安倍十郎正景 (行年十九才)

弘長三年癸亥(西暦一二六三年)北条時頼(三七才)は早くして亡くなり、時宗が將軍職を継ぐこととなった。この頃は冷害きびしく庶民の生活は貧しかった。また文永に年号がかわり、日本の国土にも大陸からの文化が流れてくるのであるが、支那では南宋帝がようやく外敵元のために勢力を失い、遂に元の時代変ろうとしている。

このためにか、政治的にも、日本がようやくその独立をおびやかされ、名僧日蓮が国難来るの予言をなし、時の將軍に言上して流罪となる。佐渡島物語における日蓮上人の説法は鬼神をもふるい立たせて弟子数人が各豪族の武將を動かし、説法の正統を力説して文永十一年將軍より罪を許され、上人は身延山に久遠寺を建立し、法華宗を弘める。日蓮上人の予言は遂に必中して、その年の秋、第一回目の蒙古の襲来がやってきた。国難来るの報は全国津々浦々に響き渡った。ウラルアルタイ山脈を越えて中央アジア、東ヨーロッパを征服したジンズキカン、モンゴルを拠点として、支那の宋に進出、大帝国を建設した。世相クビライの時に国号を『元』と改め、十三世紀の巨大な国造りをなした。

元寇・蒙古の襲来は鎌倉中期に起った。世界征服の野望、それが日本への来攻であった。元は高麗を戦滅し、文永五年(西暦一二六八年)以降たびたび日本服従を迫った。時の將軍北条時宗これを拒否したため、西暦一二七四年と一二八一年(弘安四年)の二度にわたり二十八万の大軍をもって北九州博多に攻めてきた。時の將軍時宗は、いち早く東日流安東水軍に布令、出動するよう要請状が十三福島城主安倍貞季のもとに届けられた。

本城十三福島より直ちに支城及び藤崎城へ発令、安東水軍の軍船総出動を決意し、博多の浦へ、いち早く帆を進めていった。この戦乱に出動

安倍彦四郎時季(行年四十一才) 安倍三郎忠長(行年二十二才)

右為安東一族戦死者菩提 南無阿弥陀仏

弘安甲申年五月 安倍陣十郎 是建

右十三浦三王坊建立せる古碑之写せ

秋田孝季記

二度の大軍をもって来寇した蒙古は、さらに第三次の来攻を計画したが、遂に未確定に終り、元も又勢力が衰えていった。

鎌倉幕府では、博多湾沿岸に石築提をつくり、鎮西探題を設置するなどして防備を尽したが、このため、九州の御家人に『異国警固査役』を課し、多大の軍事的経済的負担がかかり、戦役終局近くには、御家をも守護の指揮のもとに動員することにしたため、武家社会に大きな影響を与えた。

安東氏も、この後の軍船立直しには多大の負担をかけるようになるが、この元寇の役では安東水軍の活躍めざましく『安東なくして、この戦、あり得ず』と、得宗將軍時宗は、この誉れを永く讃えたという。

※ ※

保元・平治の乱に続いて全盛の平家一門は、世は平家にあらざれば人にあらずと誇った。この頃『今鏡』が完成しているが、その記によれば、初代福島城主十三左エ門尉藤原秀栄の兄は、西暦一一七〇年(嘉応)に奥羽を平征して平泉に三代將軍として、藤原秀衡が鎮守府將軍・蝦夷管領に任せられる。

おごる平家にはいつしか世相の風が冷く吹き、京都・奈良・鞍馬山の僧徒の治承の変、以仁王、頼朝の挙兵。木曾義仲の挙兵となり、遂に一の谷、屋島、壇の浦の戦となり、一族滅亡してしまった。